



▲舞鶴市とリシタン地方との人材育成交流に関する覚書交換式



▲東京五輪柔道代表選手団の歓迎セレモニー



▲入国前の1期生と日星高生とのオンライン交流



▲近畿能開大京都校での金属加工の実習



▲来年度留学予定の3人

ミルゾラフマツトさんの3人は、リシタン地方にある日本語学校「Noiko学級」で日本語を学びました。本来は、2021年に留学する予定でしたが、コロナ禍の入国制限により渡航がかなわず延期。そのような状況でも、日本語の自主学习や日星高校のインターアクトクラブとの数学の教材を使ったオンライン交流を続け、ようやく留学が実現しました。

学校では、3人とも製品の設計から加工・組み立て調整まで、ものづくりの知識と技術を幅広く学ぶ生産技術科を専攻しています。現在、1年生の後期日程を履修しており、4月から2年生に進級する予定です。合計2年間の学習を経た後、来春から舞鶴市内での就労を目指しています。市では、卒業後の3年間で市内で働くことを条件に入学

生産技術科で勉強に励む



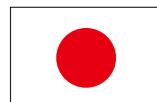
昨年、ウズベキスタン出身の3人の青年が、近畿職業能力開発大学校京都校(以下、近畿能開大京都校)に留学してから1年がたとうとしています。彼らは舞鶴市とウズベキスタン共和国フェルガナ州リシタン地方との産業技術人材育成交流の一環で同校に留学する1期生。2年間学習し、舞鶴市内での就労を目指します。

今回、市のウズベキスタンとの関わりや留学生3人が舞鶴でどのような生活を送っているのかを紹介します。
《みなと振興・国際交流課》



引き揚げ・抑留を

縁に次世代の人材育成交流へ



引き揚げ・抑留を縁に交流

舞鶴市には、戦後13年間にわたり中国や旧ソ連方面から引揚者を受け入れる引揚港としての役割を果たしてきた歴史があります。その中で、ウズベキスタンに抑留された日本人の多くは、舞鶴港に引き揚げられたという縁からウズベキスタンとの交流が始まり、その分野はスポーツ、文化、人材育成など多方面に広がり続けています。

東京五輪ホストタウン交流で活発化

2021年の東京五輪では全国47都道府県の533自治体が、大会に参加した国・地域のホストタウンとなりました。舞鶴市は、2016年にウズベキスタンのホストタウンに登録され、これが大きな転機となり、2018年から市内でレスリングや柔道の合宿を実施。本大会では、柔道代表選手団を受け入れ、舞鶴で直前合宿を行い、コロナ禍で制約はありましたが、心を込めたいおもてなしを行いました。

2期生が4月に留学予定

昨年12月、新たに「Noiko学級」の生徒3人が近畿能開大京都校を受験し、見事全員が合格。4月から2期生として、アブディエフ・マラットさん、アブドゥコディロフ・テムルベックさん、アンヴァロフ・オリフホンさんが留学する予定です。

今後、リシタン地方から留学生を受け入れ、卒業後、市内の事業所で働き、専門技術

人材育成をオリンピックレガシーに

東京五輪では「未来への継承」をコンセプトに掲げ、単に東京で開催されるスポーツ大会としてではなく、大会終了後も含め、世界全体に対して、さまざまな分野で前向きなレガシー(遺産)を残すことが基本計画に定められました。

市では、この考え方に基づき、ウズベキスタンとのホストタウン交流で築いた信頼関係をオリンピックレガシーとして次世代に継承するため、2019年、フェルガナ州リシタン地方との間で人材育成交流に関する覚書を交換。ウズベキスタンの発展に寄与する産業技術、介護福祉、農業の3分野で、ウズベキスタンの人材育成を進めることにより、友好関係を深化させることとしています。

ウズベキスタン人留学生が舞鶴へ

近畿能開大京都校に通う留学生は、イギタリエフ・シャフゾッドさん、イシモイロフ・イザティロさん、トジボエフ・

国際交流都市「舞鶴」として

を身に付けることにより、本国の将来を担う人材育成に取り組みとともに、市内での優秀な外国人材の就労や定住につなげていきます。

戦後の引き揚げと抑留の歴史をきっかけとして結ばれた舞鶴とウズベキスタンの縁は、東京五輪のホストタウン交流によって、その歴史に貴重な1ページを刻み、後世に伝えていくべき新たなステージを歩んでいます。

今後、国際交流都市として、多面的な交流を行うことで、多様性あふれるまちづくりを進めていきます。